

1. オリエンテーション、導入——聖書と聖書学・考古学
2. 旧約聖書1——宗教史的背景
3. 旧約聖書2——創造
4. 旧約聖書3——契約 5/13
5. 旧約聖書4——王権 5/20
6. 旧約聖書5——預言 5/27
7. 旧約聖書6——知恵 6/3
8. 新約聖書1——新約聖書学 6/10
9. 新約聖書2——神の国 6/17
10. 新約聖書3——イエスの譬え 6/24
11. 新約聖書4——富 7/1
12. 新約聖書5——国家 7/8
13. 新約聖書6——グノーシス
14. 受講者による研究発表1 7/15
15. 受講者による研究発表2 7/22
16. フィードバック

## <前回>古代バビロニアの占星術

### (1) 宗教史学派

1. 古代オリエントから地中海世界の宗教史におけるキリスト教
2. 「宗教史学派」(Religionsgeschichtliche Schule): 1880年代の終わりにゲッチンゲン大学の教授アルブレヒト・リッチェル(1822-89)のもとに集まってきた若き学生の間で起こった学的運動。リッチェルに対立して新しい方向を目指して動きだした。8. 教会的な枠組みからの脱却、諸宗教や文化の広い文脈から得られた材料と比較し関連づけてキリスト教を研究する。

言語学的・考古学的・比較神話的・比較宗教的方法

ヘレニズム的、東方的な諸宗教との比較: 密儀宗教、グノーシス主義

10. 終末論的聖書解釈: ヴァイス
  - 地上的・発展的・道徳的秩序に立つ神の国
  - 超越的・奇跡的・突発的な神の一方的な働きによる神の国
11. 文体的・類型論的研究: 様式批判、グンケル→ディベリウス、ブルトマン
  - 資料仮説: ヴェルハウゼンのJ、E、D、P
  - 二史料仮説

### (2) 古代バビロニアの占星術とキリスト教

1. キリスト教における異教的呪術への批判
  - ・アウグスティヌス『神の国』(413年~426年。60歳から73歳)
    - 第5巻第1章から第8章(『神の国(一)』岩波文庫)。双子問題
    - 「人間の意志もまた星の位置の影響を受けるということは不合理である。」
2. キリスト教の環境としての占星術
  - クリスマス物語における「占星術の学者たち」(マタイ2.1-12)
3. 宗教と科学・技術の間としての占星術の位置
  - ・古代において、科学・技術、呪術、宗教の三者はいわば未分化であった。
  - ・ユダヤ教とキリスト教では、世界観(運命論的決定論的)としての占星術は批判するが、自然科学の一部(後の天文学)としての占星術自体が否定されてはいない。
4. 占星術から天文学、錬金術から化学・医学という展開は、ヨーロッパ文明を理解する鍵となる。占星術の起源=古代メソポタミアの属する古代バビロニア
  - 星神信仰→天体観測の膨大な蓄積→占星術

### (3) 古代バビロニアの占星術

5. 占星術の起源
  - 紀元前1000年頃の「カルデア人の知恵」(「カルデア人」自体は、新バビロニア)。

6. 古代世界において。占星術は、先端技術であり、機密保持の対象であった。  
占星術は、元来、天変占星術としてはじまる。  
支配者は天変占星術の知識を独占しコントロールしようとした。知は力なり。  
結びつける原理：照応原理（「上のように下もしかり」）。体系的な世界観としての  
占星術（宇宙はいわば一つの生きた有機体であり統一的に捉えられる）
7. 天変占星術から宿命占星術（ホロスコープ占星術）へ  
規則性を明らかにし、それを過去のデータによって確認する（経験主義）。  
議論の精密化による双子問題などへの対応。
8. 隠された高度な知識の探求者としての占星術師
9. 世界において生じる出来事には偶然的なものは一つもなく、すべて他の出来事との連  
関で生成し、それが起こるにはそれだけの理由が存在する。  
科学的な因果的な説明では納得できない人間。  
災害や事故に遭遇した人間は科学的な説明以上の説明を求める。
10. 古代から変わらない人間。意味ある世界（意味世界）の中で生きたいという欲求。

### (3) 聖書と古代エジプト

1. ノアの子どもたち：ハムの系譜からエジプトへ cf.セムの系譜からイスラエル  
古代エジプトとイスラエルとの関連性  
都市文明の代表としてのエジプトと農耕的イスラエル
2. モーセ伝承と出エジプト
3. イエスの誕生物語とエジプト
4. 古代エジプト＝古き文明の源泉。古代ギリシャにとってのエジプト。
5. フロイト説と現代聖書学
7. 現世と来世の連続性。「現世の倫理道徳的価値が、死後の運命までも決定すると考え出  
したのがエジプトであった」「死の道徳化」(29)
8. オシリス崇拝、死者の王としてのオシリス
9. エジプト→古代地中海世界・ギリシャ→ヘレニズム・ユダヤ教→キリスト教

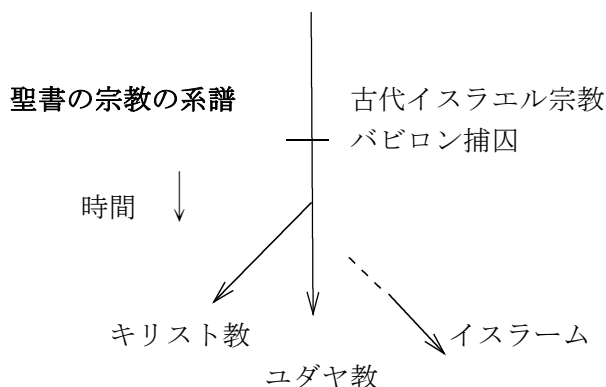


キリスト教、靈魂の不死性と煉獄

## 3. 旧約聖書 2 —— 創造

### <キリスト教の歴史的な位置づけ>

- ・旧約聖書（ヘブライ語聖書）＝古代イスラエル宗教史から  
キリスト教はアジア起源（オリエント起源）の宗教である。



- ・ヘレニズム世界におけるキリスト教会の誕生 (キリスト教の多様性)
  - パレスチナ
  - ①と②
    - ①→ ローマ帝国 (地中海世界)
      - ローマ帝国内の二つの領域
      - 東：ギリシア文化圏　ギリシア正教会、ロシア正教会
      - 西：ラテン文化圏　ローマ・カトリック教会、プロテスタント諸教派
      - ゲルマン、西欧文化の基盤
    - ②→ 東方 (シリア語文化圏へ) あるいはアフリカへ伝播したキリスト教  
正教会グループ
      - エジプト・エチオピア：コプト教会
      - シリア文化圏 → 中央アジア → 中国 → 日本?!
      - インド
- ・聖書の宗教 (アブラハムの宗教)：ユダヤ教、キリスト教、イスラーム
  - 三つの宗教伝統の比較研究の必要性

### (1) 古代イスラエル宗教と創造論

宇宙論タイプの宗教　cf. 仏教

- ・ヘレニズムとヘブライズム、存在論と聖書の最初の本格的な接点としてのヘレニズム・ユダヤ教、そのキリスト教への影響
- ・宇宙論的問題の地平における相互関係 → 対話と論争の可能性 (自然神学)
- ・ユダヤ教とキリスト教との関係：ユダヤ教はキリスト教の母体である。
  - キリスト教への多層的・多面的な影響
  - 聖書とギリシア哲学との関連づけというキリスト教教父の課題の先駆者

### 0. 創造神話の系譜

古代メソポタミア神話 (起源神話) → 旧約聖書へ。歴史時代以前。起源への問い。  
『エヌマ・エリシュ』：ドラゴン退治 (水・混沌) と英雄神、都市文明の始まり。

#### 1. 第1創造物語：人間の固有性・独自性

定型句：「神はAあれと言われた。するとそのようになった。神はAを見て良しとされた」 → 創造の善性 (有意味性)、創造 (言葉・行為) → 存在

- ・「生への畏敬」(A. シュヴァイツァー)
- ・「存在への畏敬」(H. リチャード・ニーバー)

#### 2. 「古い」「弱さ」の意味、神の肯定

#### 3. 被造物としての世界→世界の善性=合理性

#### 4. 人間存在の意味：神の像 (imago Dei) → 特殊な使命 (支配?)・人間の固有性

- ・「ある」ということの意味、老いの意味、人間の価値は存在か、行為・能力か

↓

- ・自らに与えられた理性 (合理性) によって世界の合理性を解明する人間

#### 5. 第2創造物語：関係存在としての人間 → 知恵・耕す (科学技術)

- ・パートナーとの関わりにおける人間 (人間の社会性)
- ・他の生命体との同質性・連帯性

#### 6. 聖書は男性中心的か?

## &lt;創世記1章&gt;

1 初めに、神は天地を創造された。2 地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた。3 神は言われた。「光あれ。」こうして、光があった。

4 神は光を見て、良しとされた。

.....

27 神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。男と女に創造された。28 神は彼らを祝福して言われた。「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚。空の鳥、地の上を這う生き物をすべて支配せよ。」

## &lt;創世記2章&gt;

7 主なる神は、土（アダマ）の塵で人（アダム）を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった。8 主なる神は、東の方のエデンに園を設け、自ら形づくった人をそこに置かれた。

## (2) メソポタミア文明と宗教

1. チグリスとユーフラテス川の間、現在のイラクの一部

- ・先史時代：中石器時代、新石器時代
- ・歴史時代

シュメール文明：都市国家文明・エリドゥ、ウル、ウルク、ラガシュ、ニップル・・・

BC.9000年頃：シュメール人移住、農耕開始

5300年頃：ウバイド朝

4000年頃：ウルク朝

2350年頃：アッカド王サルゴンの中央集権国家

- ・王朝と民族興亡の歴史：シュメール、バビロニア、アッカド、アッシリア、ヒッタイト、ミタンニ、ペルシャ。

・農耕（灌漑。森林伐採・砂漠化）、都市国家・建造物、土器・金属（青銅器から鉄器へ）、文字、暦、数学

2. 宇宙論的宗教の原型：星神信仰、自然神

- ・アヌ(Anu)：「神々の王朝の創始者であり神々の父」
- ・エンリル(Enlil)：「神々と人間との君主」
- ・エンキ(Enki)：「牡牛(アン)から生まれた崇高なエンキ」「大いなる山エンリルに愛されるお方」「神聖なアンの寵児」
- ・マルドゥク(Marduk)：「エンリルの後継者としてパンテオンの頂点に上りつめた」「主君」
- ・シーン(Sin)：月のパトロン
- ・シャマシュ(Samas)：「太陽のパトロン」「裁きの神」
- ・ネルガル：冥界の王
- ・イナンナ/イシュタル：女神

3. 一神教との関連。「メソポタミアの伝統においては、数多くの神々が存在していた。そして人々はそのことを忌避するどころか、論理的に受け入れていた。しかし彼らが宗教心を実際の行動に移す場合には、彼らの敬神と崇拜の念は、好んで一人の神に対して向けられた」(ボテロ、67)、「個人の神（「ある人の頭上の神）」」「単一神観の方向をめざす感情

的・宗教的傾向は「メソポタミアの神学者たちが展開させた思想体系構築のための努力の基盤に、遠くから影響を及ぼした。神学者たちはやがてメソポタミアのパンテオンを、ますます専制君主体制的な構成へと練り上げていくことなる。」(68)

### (3) メソポタミア宗教と旧約聖書

#### 4. 神話時代から族長時代：「イスラエル民族」という理念の成立以前。

後にイスラエルを構成することになる諸部族の核が徐々に形成され、次第にカナンへ移動。相互に分離した諸部族と部族宗教（部族神・守護神）。古代オリエントの諸民族と類似の宗教文化を保有（?）。移動式聖所（幕屋・箱）。星神信仰（山に顕現する）

「14:12 ああ、お前は天から落ちた／明けの明星、曙の子よ。お前は地に投げ落とされた／もろもろの国を倒した者よ。14:13 かつて、お前は心に思った。「わたしは天に上り／王座を神の星よりも高く据え／神々の集う北の果ての山に座し 14:14 雲の頂に登って／いと高き者のようになろう」と。14:15 しかし、お前は陰府に落とされた／墓穴の底に。」(イザヤ)

#### 5. 12 部族連合時代：自立的な諸部族の連合体→「イスラエル民族」という理念の成立。

士師時代、独立した地方聖所（シケム、シロ、ベテル、エルサレム）と祭儀を保有。

#### 6. 創造神話、宗教史の中における古代イスラエル宗教（比較神話学）

#### 7. 創造神話の系譜

・古代メソポタミア神話（起源神話）

『エヌマ・エリシュ』「最もよく知られたバビロニアの創造神話。七つの粘土書板、全体一〇五三行からなり、成立は前一四世紀頃と言われる。創造を果たすのはバビロンの都市神であり、バビロニアの国家神であったマルドゥクである。」(月本、17)

・ドラゴン退治（水・混沌）と英雄神（太陽・秩序）→ 都市文明の正当化

女神ティアマト（塩水、cf. 男神アプスー・淡水）

#### 8. 旧約聖書の創造物語

#### 9. 伝統的な世界観：

三層構造世界観：天／地／地下、神（々）の英雄的行為による天地創造

混沌と秩序の二項図式 → 水のメタファー：洪水神話

#### 10. 『ギルガメシュ叙事詩』

・シュメール初期王朝第三期（前 2600 年頃）の都市国家ウルクの王として実在（?）

・『叙事詩』は前 1800 年頃に「古バビロニア版」で成立、大幅改訂により「標準版」が前 2000 年期末に成立。最も新しい写本は、ヘレニズム期に作成（前三世紀）。

・主題：「死すべき人間」（人間の生に対する悲観主義）

→ 死の不可避性と永遠の生命への希求、人間はいかに生きるべきか。

「友情」（英雄ギルガメシュとエンキドゥとの間）

11. 「神々と異なり、人間は永遠に生きることはできない。その生涯には限りがある。であればこそ、死を怖れず、勇猛果敢に闘うのが人生というものである。斃れるようなことがあっても、それによって後世に名を残す r ことができれば、充分ではないか。」(月本、216)

↓

「死を怖れなかったはずのギルガメシュが、友の死を目の当たりにして、死の恐怖にとりつかれてしまう」、「死の恐怖はギルガメシュに、死に脅かされる生の意味を問わせずにはおこななかった」(217)

↓

「ウトナピシュティム」(不死の人)の語る物語

12. 大洪水物語と生き残った人間の物語(第11粘土板。元来は、ギルガメシュ伝統とは別系統)

「ウトナピシュティムは、神々が洪水を起したときの話をする。エアの助言により、ウトナピシュティムは箱船をつくり、自分と自分の家族、船大工、全ての動物を乗船させる。

6日間の嵐の後に人間は粘土になる。ウトナピシュティムの船はニシル山の頂上に着地。7日後、ウトナピシュティムは、鳩、ツバメ、カラスを放つ。ウトナピシュティムは船を開け、乗船者を解放した後、神に生け贄を捧げる。エンリルはウトナピシュティムに永遠の命を与える。」

↓

「ノアの洪水・箱船」物語(創世記6～9章): 神話から歴史へ

神(神々)の怒りと大洪水による人類の滅亡、箱船による特定の人間の生き残り。

↓

知恵文学の系譜へと継承される。

13. 神話という語り: 問いに回答を与えるのではなく、さらなる思索を生み出す。

幼稚なおとぎ話ではない。謎としての人生。

ウトナピシュティムは、ギルガメシュに、海の底に「若返り草」があることを教え、ギルガメシュはそれを手に入れた。しかし、帰還途中、蛇がその植物を呑み込んでしまう。

ギルガメシュは、永遠の生命の探究から何を学んだのか?

#### <参考文献>

1. ジャン・ボテロ 『最古の宗教——古代メソポタミア』法政大学出版局。
2. 月本昭男 『古代メソポタミアの神話と儀礼』岩波書店。
3. 月本昭男訳 『ギルガメシュ叙事詩』岩波書店。
4. 岡田明子、小林登志子 『シュメル神話の世界——粘土板に刻まれた最古のロマン』中公新書。
5. M・ノート 『イスラエル史』日本基督教団出版局。
6. 大林浩 『死と永遠の生命——そのキリスト教的理解と歴史的背景』ヨルダン社。
7. 山我哲雄 『聖書時代史 旧約篇』岩波現代文庫。
8. 荒井章三・森田雄三郎 『ユダヤ思想』大阪書籍。
9. 市川裕 『ユダヤ教の歴史』山川出版社。
10. 関根正雄 『古代イスラエルの思想家』講談社学術文庫。
11. 関根清三 『旧約聖書の思想』、『旧約聖書と哲学 現代の問いの中の一神教』岩波書店。
12. 芦名定道 『自然神学再考—近代世界とキリスト教—』晃洋書房、「科学技術の神学にむけて——現代キリスト教思想の文脈より」(日本宗教学会『宗教研究』第87巻、377-2、2013年、31-53頁)。